

新作「朝が来る」 23日公開 河瀬直美監督に聞く



◎映画「朝が来る」の一場面。カンヌ国際映画祭「オフィシャル・セレクション2020」に選ばれている
◎東京五輪公式映画監督でもある。「どうだろうと作ろうと思っています。それこそドキュメンタリーだから」＝青木久雄撮影

河瀬直美監督(51)による新作映画「朝が来る」が23日から公開される。辻村深月さんの同名小説を基に描くのは、特別養子縁組という制度を通じて男の子を授かった養親と、その子を手放した実母をめぐる物語だ。(文化部 恩田泰子)



東京に住む栗原佐都子(永作博美)は夫の清和(井浦新)と共に、来年小学校にあがる息子・朝斗(佐藤令旺)の成長を見守ってきた。実の子に恵まれなかった夫婦は6年前、民間団体の仲介で生まれたばかりの朝斗の養親になった。その時、一度だけ会った実母の片倉ひかり(詩田彩珠)は、奈良の14歳の少女だったが、ある日、ひかりを名乗る人物から電話が入り、求められる。子供を返してほしい、だめならお金を——と。

ト性のあるミステリーのような感覚も入れ込みながら、原点である『家族』に立ち戻った、自分らしい映画にもなっているかな」と河瀬監督は話す。自らの映画表現の原点となったドキュメンタリー「につつまれて」(1992年)は幼い頃に生き別れた父と邂逅するまでの心の道筋を、「かたつもし」(94年)は養母を見つめる作品だった。俳優たちには「役作り」ではなく、登場人物そのものになることを求める。そのため手法が「役積み」。撮影開始前に、役の生活を俳優に重ねてもらう。「佐都子の人生とひかりの人生、映画二つ分あるくらいそれぞれが役を積

原点の「家族」描く 私らしい映画

栗原夫婦が特別養子縁組を知るきっかけとなるドキュメンタリー番組の映像は、映画の制作準備中に河瀬監督が全国に出かけて養親や実母を取材・撮影した。「養親さんの数だけ実母がいる。そこもすっかり見せたかった」という。監督自身のそのまなざしは、劇中にも現れる。

「これは本当に究極、全部にこだわって作った映画」。ただ、映画界全体に目を向ければ、「映像表現のあり方や発表の場は、これからどんどん変わってくるだろうな」と正直感しています」と話す。6月下旬に動画配信サービスNetflixで発表された、世界的に活躍する映画監督たちによる短編映像集「Homemade/ホームメイド」に参加した。それぞれ撮ったのは、「コロナ禍の中の日常」。撮影は携帯端末でも可、納品は10日後」という条件を受けて、地元・奈良での我が子との時間を自身の手で撮影した。「それが一気に全世界に向けて翻訳され、スピーディーに見せられる。すごい時代だな、と思って」

今までは世界に出て行くために、セールス会社や各国の配給会社を通すが当たり前だった。「でも、本当に面白い作品が作れる人だったら、世界に直接アプローチできる方法がもう確立されている感じがした」

観客が劇場でスクリーンに没入するか、自宅で楽しむかによって撮り方も変わる。ただ、自分の映画に関しては、「スクリーンで見たい人がきつと多いと思う」と話す。

「光」を定着させる

映画を通して、自分と世界との関係を作ってきた。「18歳の時に、8ミリフィルムで世界を切り取った時に、私はフィルム——光がないと存在しないメディア——に魅せられた。光を丁寧に見つめれば見つめるほど、それがすくすくきれいに定着するというのがわかった」。物理的な「光」はもちろん、人や自分を取り巻く世界との関係や記憶も、だ。「カメラの目、フィルムが目で見るという行為は、私が生きているこの世界を、本当に美しいと認識できることだった」。デジタルで撮っても、世界との向き合い方は変わらない。「デジタルの時代から始めていたら、全く違う考え方になっていたと思う」

社会に託されたもの

そして観客は、暗闇の中で河瀬作品に定着された「光」を見つめることになる。「朝が来る」の場合、それは、人と人がつながることの可能性であり、かけがえのない誰かのまなざし。「見終わった後に、社会に託されたものが存在していると感じてくれたらそれだけでいい。それが希望につながる物語です」

文化
アート&エンタ